

令和元年度第2回 新潟市美術館及び新潟市新津美術館協議会 議事録要旨

日 時 令和2年2月10日(月) 午後2時から4時

会 場 新潟市美術館 講堂

出席者

(委員) 会 長	中山 輝也	新潟県博物館協議会会長
	大倉 宏	美術評論家
副会長	金山 喜昭	法政大学キャリアデザイン学部教授
	佐藤 靖子	新潟大学教育学部附属新潟中学校校長
	島 敦彦	金沢21世紀美術館館長
	建島 哲	多摩美術大学学長
	田中 咲子	新潟大学教育学部准教授
	降旗 千賀子	元目黒区美術館学芸係長
	田宮 佑子	公募委員
	茂木 美智恵	公募委員

(事務局)	前山 裕司	新潟市美術館館長
	高橋 剛	同 副館長
	松沢 寿重	同 副参事(学芸員)
	高橋 良子	同 総務係長
	荒井 直美	同 学芸係長(学芸員)
	横山 秀樹	新津美術館館長
	山口 穰	同 副館長
	長谷部 健一	同 主幹
	奥村 真名美	同 主査(学芸員)
	斎藤 未希	同 学芸員

次 第

- 1 部長挨拶 文化スポーツ部長 中野 力
- 2 開会挨拶 新津美術館館長 横山 秀樹

3 議 事

- (1) 新潟市美術館及び新津美術館 令和2年度事業計画について
- (2) その他

4 その他

5 閉会挨拶

新潟市美術館館長

前山 裕司

1 部長挨拶

(中野部長)

2019 年は開港 150 周年という、新潟市にとって記念の年だったが、昨年度は市長の交代もあり、これを政令市の第 2 ステージと捉え、また 2019 年からの 3 年間で集中改革期間と位置づけて、より一層の行財政改革、市民生活の向上に取り組んでいる。

昨年の秋には、新潟県で国民文化祭と全国障害者芸術・文化祭が初めて開催され、市としてもいろいろな市民団体と協力しながら各種事業を実施した。

いよいよ 2020 年の今年オリンピックイヤーということで、新潟市ではロシアの新体操とフランスの空手の大会直前の合宿が決まっており、聖火リレーも来て、より一層雰囲気が高まっていくと期待している。

いま、新型コロナウイルスが非常に心配な状況であるが、当市としても万全の準備をし、オリンピック・パラリンピックに向けていろいろな文化プログラムや交流事業の準備を進め、文化芸術の創造性を活かしたまちづくりを進めていきたい。

今日は皆様から忌憚のないご意見をお聞かせいただき、よりよい美術館の運営に活かしていきたい。

2 開会挨拶

(横山館長)

令和元年度の両館の事業について、忌憚のないご意見をいただきたい。

3 議事

(中山会長)

この会も回を重ね、両館とも皆さんに見ていただく素晴らしい展示が行われてきたと思う。そのような中、今、新潟県も新潟市も財政難で、美術館にしわ寄せがこなければいいと思っている。

新型コロナウイルスが早く終息して、美術館にもっと市民の方が来るよう期待したい。

事務局から資料 1、資料 2 及びパワーポイントの画像により新潟市美術館の令和 2 年度の事業計画について説明。

続いて、事務局から資料 3、資料 4 及びパワーポイントの画像により新津美術館の令和 2 年度の事業計画について説明。

(中山会長)

まず、新潟市美術館について、質問、意見をいただきたい。

(田中委員)

自主企画が前半に多く、すごく意欲的である。8月の式場隆三郎展は、たまたま先月の授業で学生が見つめてきた論文が式場に関する論文で、すごくタイムリーでびっくりしている。新潟大学医学部の前身校の出身者ということで、新潟大学などとの連携は何か考えているか。それから、式場はアール・ブリュットなどの作家を評価した先駆けだと思うが、アール・ブリュットの分野の教育普及も計画しているか。

(前山館長)

特に新潟大学との連携は計画していない。ただ、展覧会担当者から聞いているところでは、調査の段階で式場の周り、特に山下清の周辺に新潟関係者がすごく多く、地縁なのか分からないが、その掘り起こしは進んでいくと思う。

アール・ブリュットに関連した事業は計画していないが、山下清以外の当時の特異児童と呼ばれた人たちの作品も出品されるので、これまでの山下清展等とはちがう紹介の仕方ができると思っている。

(金山委員)

新潟市美術館だけでなく、新津美術館も含めて聞きたい。こういう事業計画は、そもそも美術館の全体的なミッションや運営方針があった上で施策を立て、施策を実施していくための事業を段階的に落とし込んでいくものだ。ところが、ミッションは何か、それを受けた施策はどうなっているか、いわゆる骨組みが明らかではないので、今後、こういう事業計画に併せて出してもらいたい。

(高橋副館長)

いただいたご意見を参考にして進めていきたい。昨年、第2回協議会に運営方針の資料をお出ししたので、今回は省略させていただいたが、今回も運営方針の資料をお出しすべきだったと反省している。

(大倉委員)

とてもバランスよく立てられた企画だと思う。昨年、砂丘館になかなか美術館の方が来ないと言ったが、私も最近、美術館に来られず、バウハウス展とアンドリュウ・ワイエス展は見られなかったが、周りではとても評判が良かった。自主企画展は必ず見に行きたいと思っ

ており、長沢明さんは砂丘館がオープンした翌年に一回展覧会をしてもらった。大変良い作家なので楽しみにしたい。

また、式場隆三郎については、部分的には知っているが、今回の展覧会ではいろいろな面を紹介してもらえないのではないかと思う。特にこの二つは楽しみである。

最近はこちらかというコレクション展のほうが楽しみになっている。個人的なことだが、先ほどの映像の佐藤哲三の作品は私の母の姉がモデルだということを思い出し、その絵が美術館に收藏されたというのが今日分かり、ちょっと不思議な気持ちである。

(田宮委員)

企画展の長沢明展と式場隆三郎展の二つがすごく面白そうである。二人とも新潟出身で、自分と共通点があるので興味が沸いた。原田マハさんの『たゆたえども沈まず』というゴッホを題材にした小説を一昨日読み、その冒頭に式場さんという人が出てきたが、今日「式場ってもしかして」とつながったのが面白かった。何か共通点を見つけることで、この展覧会は面白そう、気になると思う人も多いのではないか。そういう点でも何か宣伝ができるという。

アンドリュー・ワイエス展の出口の近くに置かれていたワークシートを見て結構楽しかったが、内容が少し子ども向けだと感じた。大人も記入していたが、アンドリュー・ワイエス展に子どもがたくさん来るのか疑問である。あえて子どもが書くようなワークシートにしたのはなぜか。また、次回やるときは、書かれたものに対して美術館側からの何か一言、返答があってもいいと思う。

(事務局：荒井)

原田マハさんの書籍については、ぜひ広報にも活用していきたい。

ワイエス展のワークシートは、もともと小学校、中学校の生徒に配布するために作成したもので、ご指摘のとおり、ワイエス展は必ずしも子ども向けではない部分もあるが、中学校の美術の教科書にワイエスの作品が載っており、ぜひ子どもたちに生の作品を美術館で見てもらいたいということから作成した。

ただ、大人も見ても喜んだり、一緒にやったりしていたので、今後はそういう工夫も出来る限りしていきたい。ワークシートの角に割引券をつけて、一緒に来た大人は100円引きになる。「学べる美術館」は運営方針にもあり、今回はそういう工夫をしてみた。

(建島委員)

今日は早めに来たので常設展示をゆっくり見たが、非常に面白い。次の常設展にも期待し

たい。来年度は、1期が1か月ちょっと、2期が6か月、3期が4か月と、スパンが大幅に違っているが、どういう意図か。

(事務局：荒井)

1期が6月7日までと短いのは、長沢明展の影響である。常設展示室の一部、中展示室を長沢明の作品の一部が占有するため、長沢展の終わりとともに展示を組み替える必要が生じた。通常だと7月、8月くらいまでやるコレクション展Ⅰが極端に短くなったため、コレクション展ⅠとⅡは、名品を中心としながらもその見え方が変わるという趣向にし、展示替えのようだが違う展示になる予定である。第2期が長くなりバランスが悪くなったが、苦肉の策でそのような形を取った。

(建島委員)

「入梅から大雪のNCAMコレクション」とあるが、雪が少なくてもいいのか。

名品を見せることと企画性を持たせることの両方でやるのか。企画展という意識が強いのか、いわゆる名品をかわりばんこに見せるのか、どちらに重点を置いているか。

(事務局：荒井)

タイトルは、企画性よりも会期末あるいは会期初めの時期と近い二十四節季、季節の名前を使った。その季節らしい作品を出そうと考えているが、これまでのようにテーマ性というよりは、自由な枠組みにしておき、詳細な中身についてはこれからしっかり練りたい。

その中で、近年、展示機会を逸していた最近の新収蔵品を、これまで持っていた作品と併せて見せたいと思っている。

(島委員)

長沢明はまだ50歳くらいで、このくらいの年代の人の個展が行われるのはとてもよい。新潟出身やゆかりの作家の個展やグループ展を継続的に行うとよいと思う。

「日本画界に新風を吹き込んだ」という解説の、どの辺りが新風なのかを展覧会の中で明示するとよい。作者のトークしかないようだが、例えば北澤憲昭さんなど、その世代の評論家が同時代を見てきた中で、長沢さんはどういう位置づけかなどを話す機会があるといいと思う。

「きかんしゃトーマス」は結構面白いと思う。今年社会人になった私の子どもが幼い頃に、今のアニメーションになる以前の、とてもギクシャクした動きのトーマスを観ていた。小さい子どもがたくさん来ると思うので、その子どもたちが新潟市美術館の魅力、あるいはコレクションに親しんでもらうきっかけにはなるのではないか。あなどれない企画だと思う。できないとは思いますが、コレクション展を見ないとトーマス展に入れないようにしたらどうか。

(事務局：荒井)

今のところ長沢明の日本画における立ち位置について北澤さんに話してもらうなど具体的な予定はないが、確かにME T A IIなどの展覧会で同じような世代で日本画を変革しようという活動をしており、野地耕一郎さんもよく評論を書いているので、検討したい。

(茂木委員)

「きかんしゃトーマス」は若い世代、小さい子どもを取り込もうと正月は2日からやるということで、冬休みも春休みも兼ねての企画展はそういうターゲットを受け入れられると思う。今やっている草間彌生展では、草間さんは24時間テレビで嵐とコラボしたりして、若い人たちも知っているのもっと若い世代を取り込むという意味で、若い人たちが知っている作家の展覧会もあったらいいと思う。

アートリップで学芸員がいろいろな学校に行っているが、今、ほとんどの中学校で文化祭がなくなっている状況である。美術の時間が減って、受験勉強があるので美術のために授業時間を割くことがなかなか難しくなっている。校長会にも行っているようなので、ぜひ校長先生にそういう話をして、もっと子どもたちが美術に触れられるようなことをしてもらいたい。

昨年の6月5日の新潟日報に、県の美術館の大きな役割の一つに、地元作家らの作品の研究があるが、予算がないからできなくなっていると大きく出ていたが、市はどうなっているか。

(事務局：松沢)

県の美術館の関係者とも話をする機会があるが、大変厳しい状況だときいている。新潟市も決して楽ではないが、地域の美術館ということで、地域性を継続的に大切にしていかなければならないと考えており、細々とではあるが新潟ゆかりの作家の資料収集も進めている。収集するということは、当然ながらそれを研究し紹介するという、美術館としての基礎的使命も果たさなければならない。お金はなくても地道に続けていこうと努めている。

昨年度は、新潟の巻の出身の田畑あきら子の没後50年ということで、大倉委員からもお力添えをいただき研究紀要にまとめ、また、コレクション展Ⅱでも小さいコーナーを設けて紹介した。

また、阿部展也も重要な作家であり、時間をかけて調査・研究してきたが、当館が提案・企画した展覧会が全国巡回し、広く成果を披露することができた。そういう取組みを今後も続けたい。

(降旗委員)

長沢明展、式場隆三郎展は非常に興味がある。式場隆三郎については、いろいろな視点からの切り口があるので、具体的にどういうふうになるか、とても興味がある。広島と新潟と練馬に巡回するということだが、開催館によりフォーカスするところが違うなどの工夫はあるか。

新潟市美術館のコレクション展は非常にレベルが高いと皆が言っている。今回は視点を名品にということだが、今までのコレクション展を通して見られるパネルなどの資料を作るとか、もっと「新潟市美術館のコレクション展ここにあり」みたいなことをアピールできればよいと思う。

教育普及については、企画展の関連事業はこれからだということだが、長沢明さんのダイナミックな企画に期待したい。横須賀美術館で長沢さんに関するワークショップがあるか。事務局の説明では、子どもも大人も参加できるワークショップをラウンジNで展開しているということだが、親子でない大人と子どもが同居する、長沢さんのワークショップができれば、非常に新しい形でよいと思う。

(事務局：荒井)

これまでのコレクション展を通覧するようなことはしていないので、宿題をいただいた。現在やっている「かわいい！かわいい？」では「かわいい」作品に投票をしてもらい、目で見える形でデッドヒートを繰り広げているが、最終的なランキングの発表を次のコレクション展で検討している。「かわいい！かわいい？」を見ていない人にも、皆さんからの反応が分かる形になる。

長沢展に関して、横須賀では3月に作家によるワークショップを予定しているので、見学に行こうと考えている。一般の方が触れにくい金箔や銀箔を使ったワークショップのようだ。当館では、もう少し長沢さんの制作に近いことをできないかと、相談しているところである。

ラウンジNも長沢展に連動して、長沢さんが切り絵のような、ドローイングの立体版のような作品を作っているの、それを応用したプログラムをやりたい。

また、親子ではない大人と子どもでのワークショップは、今後実現に向けて努力していきたい。

(前山館長)

式場展に出品される資料の大半が式場病院のもので、この部分はほとんど変わらずに巡回する。関連作家の作品など美術館等から借りるものは、借りる側の条件もあり、会場ごとに変わることはあるだろうが、大きく捉え方が変わることはない。

(佐藤委員)

6月16日から7月29日のベン・シャーン展や、8月8日から式場展は、学校はちょうど夏休みだが、今、オリ・パラ教育ということでオリンピックやパラリンピックの見方などについてのデータやワークシートがたくさん学校に送られてきている。どのようにしたら子どもたちが美術館に足を運ぶかを考えると、ワークシートの割引券制度はよいと思う。アイスクリーム割引券や、ショップとコラボするとか、何かおいしいものがあると子どもたちは来るのではないか。

昨年のアンドリュー・ワイエス展について、本物の「クリスティーナの世界」はなかったが、多くの原画があり、また中学校の教科書にもワイエスの作品が載っており、オルソン・ハウスの木片を見ることができて夢のようだった。そういう本物や、雰囲気や風景も一緒に展示してあり有り難かった。

私はザハ・ハジドの新国立競技場案のほうが好きだが、インポッシブル・アーキテクチャーでは、作品だけでなくたくさんの設計書類があり、莫大な時間と費用をかけて設計されたが残念ながらということで、先週も新しい新国立競技場近くで見学をしたが、やはりザハのほう为世界にアピールできる建築物として斬新で良かったのではないかと思った。

茂木委員の話のとおり、20年前に土曜日に学校がなくなってから一気に技術・家庭科、美術、音楽の時間が半分になった。今、1年生は音楽と美術で分け合って週に1.3時間、そして2年生、3年生は1時間ずつしかない。美術の免許を持っている教員も新潟県内の学校では53パーセントくらいしかない。59校の新潟市内の中学校の校長で美術の免許を持っているのは私と山潟中学校の校長だけである。校長に訴えるのはいいが、授業時間が少なく、免許を持っている職員も半分の学校にしか配置されていない状況を考えると、美術を頑張れない状況である。私も前任校で、出前授業や鑑賞教室など荒井学芸員から助けて頂き、非常に助かった。「あなた今年は美術をやってね」といわれて例えば国語の先生が美術をやるような現状が学校現場にはある。美術館からの様々な支援は大変助かる。デジタルデータでもいいので、もっと学校に支援資料が頂けると大変助かる。

(中山会長)

私は、今回、新潟市美術館と新津美術館のきちんとしたフレームの中で、バランスよく展覧会が開かれるのではないかと思う。

コレクション展について、無理をして事業名に題名を載せる必要はあるのか。そこへ行き、適当にいろいろなものがあって面白いなと思うのが美術館ではないだろうか。無理して題名を決めてやっていると、がっかりすることもあるので、その館のコレクションが自由に見ら

れることがよいのではないかと思う。

式場隆三郎に対する評価が非常に高いようだが、ずっと昔、私が学生の頃、医学部の医者と随分つきあいがあったが、山下清を売り出しているが、出身母校ではあまり評判がよくなかったようである。それは今の美術の評価とは関係ないが、そのようなことを記憶しているため、なおさらこの展覧会を見たいと思っている。

次は新津美術館について質問、意見をいただきたい。

(島委員)

横山操の展覧会は、これまでもいろいろな美術館で開催されてきた。今回の横山展はそれなりの規模になるのではないかと思うが、近年の大規模な展覧会は、いつごろ、どこで行われたか。

(横山館長)

大きい展覧会は、20年くらい前に、東京国立近代美術館と長岡の新潟県立近代美術館でやった。

(島委員)

今回の横山展の特徴的なところはどこか。

(横山館長)

先ほどスライドでお見せした「渡船場」という作品は、今までは絵葉書しかなかったが、4年前、今までまったく表に出ていなかった本画4点と川端画学校で学んだときのスケッチ類が出てきて、燕市に寄贈されたので、それを今回紹介する。また、操の奥さんの基子さんが3年前に亡くなり、かなりの数の操の作品が残った。今回は、戦前の作品と横山家に残っていた作品を中心に、新しいものを入れながら見せたい。大作はほとんど出ないが、また違った面をお見せできると思う。

(大倉委員)

新潟市美術館のきかんしゃトーマスでふと思い出したが、佐藤哲三が機関車が大好きで、汽車の絵にすごく感激したというエピソードがある。新潟市内でも汽車の絵を持っている方がいるし、所蔵品にも確か機関車等を描いた素描があったと思う。ほかに長谷川利行も汽車の絵を描いているので、トーマスに合わせて、そういう汽車の作品も常設で飾ると面白い。

島委員の、長沢明さんのような世代の作家をグループ展でもいいからもっと紹介してほしいという意見に、私もまったく同感である。最近、新津美術館も、形はオーソドックスだが、現役の作家の作品を多数展示する企画展をやっており、とても貴重だ。来年は横山操展があ

るからか、区の隠れた名品展や現役の作家の作品展がないのが少しさみしい。

砂丘館でこの秋に「明るい色」をテーマに、世代も傾向もまったく違う作家のグループ展をやったが、学芸員のユニークな発想で、新津美術館がこれまでやってきたオーソドックスな形ではないグループ展を、新潟市美術館か新津美術館で年に1回くらいやると、新潟市で活躍している作家たちも元気になり、とても面白いと思う。

砂丘館では、来年は田畑あきら子さんと交流の深かった渡辺隆次さんの展覧会を秋に予定している。トーマス展の時期には新潟出身で亡くなった若林オサムさんという抽象の作家と霜鳥健二さんの二人展を予定している。近隣のNSG美術館では、現役の作家や最近活躍した作家のグループ展も旺盛に企画しているので、それに呼応するような展示も何年かに1回、できれば年2回くらい、新潟市美術館か新津美術館でやってもらいたい。

水と土の芸術祭でかなり多様な表現が展開したが、芸術祭がなくなり、そういう表現に親しんできた人はさみしい思いをしている。あいちトリエンナーレでは映像の作品がすごく多く、パフォーマンスは現代の表現で非常に重要なジャンルだと思うが、そういうインスタレーションやパフォーマンスなどの映像の表現も、年に何回か積極的に紹介してほしいし、展覧会の関連イベントでパフォーマンスもやってもらえる可能性があるのではないかな。期待したい。

(金山委員)

新津美術館で毎年のようにやっていた隠れた名品展を、事情があると思うが、来年度はやらないということで、私もさみしく思う。今やっている西蒲区の名品展が第6弾だが、ひととおり回ったのか。

(横山館長)

北区と中央区が残っている。

(金山委員)

一つの区が1回で終わりということではなく、「うちの区にもまだあるよ」という新発見が相乗効果として出てくると思うので、ほかの館にはあまりない、こういう地元ならではの企画を大事にして今後もぜひ続けていってもらいたい。

(田中委員)

ちょうど昨日見に行った。私も隠れた名品展というのは非常にいい企画だと思うが、準備が大変で毎年開催するのは難しいと聞いている。今回の西蒲区の展示は、すごく充実している印象を受けた。回を重ねるごとに、展覧会の構成にどんどん工夫が加わっているようだ。

これからどんどん成長していくテーマの展覧会だと思う。単に作品を見せて紹介するだけではなく、収蔵に至るストーリーや、それを区民がどのように受け入れているかという受容のストーリーを紹介すると、さらに幅が広がるのではないかと。横山操も地元新潟の作家であり、そういう切り口も加えられるのではないかと。

また、これまでと違い、単に技法で分類するだけではなく、洋画は画題、主題によって三つ、四つのセクションに分けてあり、とても見やすかった。学芸員の工夫が感じられて良かった。今、ものすごく少人数で業務を回していると聞いた。今回の西蒲区の展覧会も、学芸員になってまだわずかししか経たない職員が頑張っていて、観客の反応も非常によく、西蒲区の魅力を発掘するのに若い学芸員が本当に頑張ったということが伝わってきた。館長自らが展覧会企画などプレーヤーとしての仕事までいろいろやっていて忙しい美術館であることは認識しているが、若い学芸員が単に仕事をこなすだけでなく、いろいろな経験を積んで、今後、後進の学芸員を育てる立場になれるよう、育成の環境が整うことを祈っている。

(横山館長)

今年度の展覧会についても、2人の学芸員が本来担当する展覧会のほかに、急遽、途中から他の展覧会を受け持つことになり、非常に過重となった。学芸員をもっと育成して、いろいろなことを勉強させたいと思っているが、今はなかなかできない状況である。育児休暇がまだ続き、療養休暇も復帰の問題があるため、今はできるだけ学芸員の負担を減らしたいと思い、来年度は展覧会を一本減らした。田中委員のおっしゃるように、勉強して自分の展覧会を作っていけるよう育成するのが望ましいと思っている。

(茂木委員)

実情を聞き、美術館には働き方改革はないのかと思った。

ミュシャ展や不思議の国のアリス展という明るい感じの展覧会が、夏休みで若い人たちも楽しめると思った。グッズもたくさん販売するとチラシにあり、若い人たちは喜ぶのではないかと。リサ・ラーソン展のときもグッズがほとんど売れてしまっている状態だったので、人がいっぱい来てお金もいっぱい入り、働き方改革も行われていくといいと思う。

利用者にやさしいサービスとして「こどもタイム」や「あいてマンデ〜」を実施しているが、実情はどうか。参加者からはどんな感想をもらっているか。

(横山館長)

「こどもタイム」、「あいてマンデ〜」は私の就任前からやっている。長くやっているので定着してきて、月曜日の開館もかなりの人が入ってくる。また、「こどもタイム」のときはお話をする人もチラホラ見受けられ、効果はあがってきていると思う。

中には、「どうして静かに見ることができないのですか」と言う方もいるが、続けていくことによってご理解いただくしかないと思う。

(田宮委員)

どの企画展もすごく人が来そうだ。私の同僚は、普段は美術館などには行かない人だが「ミュシャが来るんだ、絶対見に行く」と言っていた。私も中学生の頃からミュシャはすごく魅力的な作品だと思っていたし、アニメやマンガやイラストなどを好きな人たちからもすごく支持されている。

同じく、不思議の国のアリスも物語以上にモチーフがすごく魅力的で、ファッションや作品に取り入れる人がすごく多い。普段は美術館に行かないという人もたくさん見に来ると思う。

今まで行ったミイラ展はすごく混んだ経験があるので、ミイラ展もすごく人が集まると思う。どちらかという若い人たちがたくさん来たがる展覧会ではないか。難しいとは思いますが、車を持たない人、バスを主に使う人も来やすくなる制度があるとよい。

今、開催されている新潟市美術館の草間彌生展も、ミュシャ展も全作品撮影OKだが、その理由はなにか。

(横山館長)

借りる作品には著作権があるが、ミュシャは著作権が切れているという理由がある。また、ミュシャは今、国内でも三つか四つの展覧会が巡回しているが、当館でやる展覧会は個人のコレクターが所蔵されているもので、みんなにもっと知ってもらいたいというその方の意向で、写真撮影が可能になった。その方はミュシャのご遺族とも親交があり、ご遺族の意向でもある。

(降旗委員)

どれも人が入る展覧会になるだろうと思う。国立科学博物館でミイラ展をやっているが、どのくらいの入館者を予想しているか。

(横山館長)

当初は3万から4万人と考えていたが、今、東京のほうが50万人に届きそうなので、少し考えないといけないと思っている。

(降旗委員)

日本人はミイラが大好きなので、ものすごく人が入ると思うが、学芸員の数が心配である。人がたくさん入れば美術館全体ではうれしい負担だが、それだけ学芸員の負担が出てしまう

ので、そこが気がかりである。

教育普及についても、職員数の面で、新津美術館に言うのはちょっと難しい。毎回いつも同じようなことを話ししていて、それを横山館長や皆さんもよく分かっていて、その中でいろいろ苦労して工夫しているとすごく感じている。

新津美術館は利用者にやさしいサービスを売りにしていて、これを前面に出している美術館はほかにあまりないが、それも定着してきているということなので、それをもっとアピールしていくとよい。話し声が耳障りでうるさいというお客さんにも理解してもらおう工夫が必要だと思う。

(横山館長)

そのために、スタッフには統一のジャンパーを着せている。着ていないときには「あなた誰ですか。なぜ注意するのですか。」と言われたので、その後は誰が見ても館の職員だと分かるよう同じものを着せている。かなりクレームは減ってきた。子どもに対して注意するときは子どもの目線までしゃがんで注意するというようなことについても研修などを行っている。

(建島委員)

普及事業に、出前美術館という、学芸員が作家と一緒に学校に出向く事業があり面白い。あまりほかでは聞いたことがない。これは、作家に作品を持って行ってもらい、子どもたちに話をするというシステムか。

(横山館長)

今、学校で美術の先生がいなくなったり少なくなっている。私が子どもの頃は美術の授業に実技があったが、今はなくなり、鑑賞教育のほうに中心が移っているのだから、出前美術館では作家に子どもたちと一緒に制作してもらっている。

(建島委員)

作家が時間内にできるような形で、「こういうふうには描いたら、こういうふうになるよ」というところをやり、あとは子どもたちの自由な発想で作ってもらうということか。これは美術の時間の枠内でやるのか、別に課外にやるのか。

(横山館長)

美術の時間内でやったり、もう1コマ増やしてくれる学校もある。二つのクラスが一緒に受ける学校もある。

(建島委員)

実際の美術の授業が少なくなって、具体的に言うと2コマが1コマになってしまっている

ので、制作は、簡単なクロッキーくらいはできるが、時間の問題があって、鑑賞教育に重点を置かざるを得ない。ほとんどの人が鑑賞者として育っていくわけだから、鑑賞教育は重要だというのは分かるし、美術館にとっては一番重要だと思うが、アーティストという人たちもそこから育ってほしい。美術大学にもよく、ワークショップをやってほしいとか、学生を送り込んでほしいと依頼が来る。しかし美術館がそういうことに取り組んでいるのはあまり聞いたことがないので、非常に重要なことを続けていると思う。美術館でワークショップをやったり、学校に出前するのも確かに重要だと思う。これをぜひ続けてもらいたい。それがまた美術館に還元するようなシステムがあると、なおいいと思う。

(横山館長)

作家が、子どもたちと一緒にやるということを非常に喜んでいる。

(建島委員)

もちろん若い作家は子どもたちとやるということもあるが、今、芸術院会員が必ず小学校や中学校に行って授業をしなくてはいけないというシステムがあるらしい。会員の中には怒っている人も、もうしたくないという人もいるが、面白いのは、先生よりよほど面白い絵描きさんに会って、子どもたちが本当に生き生きしている。そういうことが好きな人、うまい人に限るのだろうが、アーティストにとっても子どもたちとやって、彼らにはない意見を得たりすることがすごく楽しいようだ。確かに子どもたちにとってアーティストと出会うということは人生経験の中でも非常に面白いことだろうし、アーティストにとってもそれは楽しいことだと思う。みんながみんなというわけではないだろうが、そういうよいサイクルができていくといいと思う。

(横山館長)

今、普通の学校だけではなく、特別支援学級からも来てほしいという話はある。

(佐藤委員)

出前美術館は本当に素晴らしいと思う。芸術活動もどんどん毎年変わっていて、新鮮味がある。私も何回か利用させてもらった。

巡回展の東京会場では必ずといっていいほど音声ガイドがある。新潟市美術館や新津美術館ではあるときとないときがあるが、やはりあると作品の見方が分かるようになる。500円か540円くらいで、東京では自動販売機で利用券を買うようにして、人員削減している。巡回展でのようなシステムがあれば、ぜひ導入してほしい。

県立植物園、鉄道博物館との連携について、観覧料の割引があるということか。あともうふたつ、計5つの施設で連携強化をしているという説明があったが、どのような連携か。

(横山館長)

3施設の連携では、当日の入場券を持参すると観覧料を2割引きにする。5施設のほうは、なかに無料の施設もあるため、年に一、二回、大きなイベントを一緒にやり、施設を巡るスタンプラリーをしている。

(佐藤委員)

スタンプラリーでは何か賞品があるのか。

(横山館長)

埋蔵文化財センターの手作りのものを差上げている。

(中山会長)

館長の企画力で「隠れた名品展」はうまくいっているが、隠れたものはなく、誇るものしか残っていないのではないかと思う。「隠れた」という名前は面白いが。

特に新津美術館では、例えばミイラ展など、オーソドックスではない型破りなものを入れて行ってほしい。また、新津美術館は設立したときは所蔵品を持たない美術館だったが、今はすごい所蔵数である。収蔵庫も大変ではないか。

(横山館長)

収蔵庫はまだ余裕がある。現在、収蔵品は860点くらいある。

(中山会長)

コレクション展には名前を付けないのもよいのではないかと思う。

ミュシャ展は、オレンジ革命の頃、数回行く機会があり、プラハでミュシャを見たが、すごくよかった。当時はそんな立派な美術館ではなかったと思うが、そこに展示されていたものと今回はちょっとニュアンスが違うような感じで、期待している。

(大倉委員)

会長が新潟市美術館のコレクション展で、テーマがないのもよいのではとおっしゃって、私も似たようなことを以前言ったのだが、最近、ほかの美術館の常設展を見に行くと新潟に戻ってくると、やはり新潟市美術館の常設はすごく面白いと思う。所蔵品は価格のヒエラルキーや知名度のヒエラルキー、ジャンル別の区分があるのだが、テーマを設けることによって、そういうものに関係ない組み合わせで作品が並んでいることが多く、それがとても面白い。この作品はこういういい作品だったのだと改めて発見がある。以前も、砂井正七の素描がメダルド・ロツと一緒に並んでいて、普通はあまりないことだが、並んだことで砂井はすごくいい作家だと改めて思った。テーマを設けなくてもいいが、学芸員が自由な発想で所

蔵品を並べることは、新潟市美術館の一つの特色としてやっていくととてもいいと思う。将来的にもっと常設展示室が広がり、オーソドックスな展示と、企画性のある展示が、同時にできるようになればさらに楽しいのではないか。

(中山会長)

いろいろなご意見をいただき、まことにありがとうございました。いただいたご意見について、事務局でさらに検討してもらいたい。

以上をもって、本日の議事は終了する。

4 その他

退任予定の各委員から挨拶。

5 閉会挨拶

(前山館長)

本日は、熱心にご議論いただきありがとうございました。本日いただいたご意見を両館の運営の参考にさせていただきたい。

また、退任される委員の方々、本当にありがとうございました。これからも美術館の応援団として美術館をあたたく見守っていただきたい。